OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Mahābhārata VI.5-13の世界観
Author(s)	井上, 信生
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1997, 31, p. 43-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10785
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Mahābhārata Ⅵ.5-13の世界観

井上信生

Mahābhārata（MBh）第Ⅵ巻（Bhīṣmaparvan）の巻頭は、開戦直前の場面を描いている。Kuru 一族の長老でもある聖仙 Kṛṣṇadvaipāyana-vyāsa が、盲目の老王 Dhṛtarāṣṭra に大戦の帰趨に関して予言を与えて去った後、王とスータ（sūta：王の車に陪乗し補佐役・伝令役を勤める）の Sañjaya の対話が始まる。その始めの部分（Ⅵ.5-13）は、大地のありさまに関する王の問いに、Vyāsa によって特殊な眼力を与えられた Sañjaya が答える体裁をとっている。Sañjaya は先ず生物の分類（Ⅵ.5.1-21）と五大元素説（Ⅵ.6.1-11）を語り、次いで大地の形態や山岳・河川・民族の名称等を詳細に述べる（Ⅵ.6.12-13.50）。この論文では始めに、五大元素説の部分に窺われる世界観を検討し、次に大地の形態に関してこれまでの研究に若干の知見を付け加えたい。

1. Ⅵ.5.1-6.11

Vyāsa が去った後 Dhṛtarāṣṭra 王は思いにふけり、王侯たちが大地の支配権をめぐって争っていることを慨嘆する。これをきっかけに大地に関する対話が始まる。Sañjaya は生物の分類を教えた上で、王侯たちが争うのは、大地を基盤とする全ての動植物の支配を欲してであることを示す。

次いで彼は、この世に存在するすべてが、均しく五つの大元素（mahābhūta）であることを教える[1]。それは地・水・火・風・空であり、それぞれ五つないし一つの性質（guṇa）を備えている。次いで Sañjaya は

述べる：

yadā tu viṣamībhāvam āviśanti parasparam/VI.6.8cd/
tadā dehair dehavanto vyatirohanti nānyathā//VI.6.8ef//
一方、[諸元素が] 互いに不均衡の状態に陥るときには「身体をもつもの」たちは、一様に、身体を離れて [次の身体に] 乗ります。

この「身体をもつもの (dehavat)」は、Upaniṣad や Bhagavadgītā に現れる "dehin" と同じものであろう。これらのテキスト[2] で dehin は、肉体が死んでも滅びずに新しい肉体を得ていくものと考えられている。このVI.6.8でも、五元素から成る肉体とそれから独立の "dehavat" が対比されているのであろう。さらに Sañjaya は続ける：

ānupūrvyād vinaśyanti jāyante cānupūrvaśaḥ/
sarvāṇy aparimeyāni tad eṣāṃ rūpam aiśvaram//VI.6.9//
tatratatra hi dṛśyante dhātavaḥ pāñcabhautikāḥ/
teṣāṃ manuṣyās tarkeṇa pramāṇāni pracakṣate//VI.6.10//
acintyāḥ khalu ye bhāvā na tāṃs tarkeṇa sādhayet/
prakṛtibhyaḥ paraṃ yat tu tad acintyasya lakṣaṇam//VI.6.11//
全ての不可測な [五元素は] 順序にしたがって消滅し、順次に生じます。それがこれらにとって支配的な姿なのです (9)。いたるところ、五元素から成る [世界を構成する] 要素が見られます。人々は思慮してそれらの大きさを述べています(10)。不可思の存在なら思慮してもうまくもっていくことはできません。根元の質料 [即五元素] から離れていることが不可思のものの特徴です (11)。

VI.6.11の "prakṛti (pl.)" は文脈上五元素を指す。ここで存在は根元の質料 (即五元素) から成るものと、それから独立のものとに二分されることになる。前者には世界を構成する諸要素 (dhātu pl.) が属する (VI.6.10ab)。また上で触れたVI.6.8からすると、前者には生物の身体が、後者には生き物の霊魂 ("dehavat") が含まれる。「大きさ」などを思量できるのは前者だけである (VI.6.10cd)。そしてそれは常住ではない。五元素が法則[3] に従って生滅するからである (VI.6.9)。このテキスト (VI.5-13) の基

調となる思想がここにこのように示された。Dhṛtarāṣṭra が「大きさ」を尋ねた（VI.5.7；6.2）大地についてこの後 Sañjaya はいよいよ説明を開始するが、その大地もまた、それを拠り所とする生き物たち（の身体）ともども常住たり得ない。── VI.9.15以下、乳海の北に住みそれ自身（世界の）収束（saṃkṣepa）であり展開（vistara）である主、Hari•Vaikuṇṭha を説明された Dhṛtarāṣṭra が次のように嘆じるのは、この観念に呼応しているのである：

asaṃśayaṃ sūtaputra kālaḥ saṃkṣipate jagat/
sṛjate ca punaḥ sarvaṃ neha vidyati śāśvatam//VI.9.20c-f//
スータよ疑いなく時は世界を収束し、再び万物を創出する。この世に永遠なものはない。

2. VI.6.12-13.50

Sañjaya は生物の分類と五大元素説を終えて、大地の様相を語り始める。VI.6.1から、彼がコスモグラフィーを説き終わるVI.13.48までは、ほぼ同じテキストが Padmapurāṇa（Ānandāśrama ed. 1.3.1-9.40; Venkateśvara Press ed. 2.3.1-9.42）に収録されており、さらにそのコスモグラフィーの部分は他の諸プラーナで大地のありさまを説く部分と非常に多くの共通点をもつ。

主立ったプラーナのコスモグラフィーは概ね同じものである。Kirfelは *Kosmographie* の 1．Abschnitt II でその内容を記述しているが、*Weltgebäude* では、現存諸本を対照しつつ新旧二種の「原テキスト」の復元を試みている。一般の読者のために概略を紹介したものとしては、Jacobiの "Cosmogony and Cosmology"（pp.159-160）に Viṣṇupurāṇa をもとにした記述がある。また定方晟『インド宇宙誌』中の「プラーナの宇宙観」は、やはり Viṣṇupurāṇa の主にコスモグラフィー部分を、Wilson の英訳に

基づきながら紹介したものだが、挿図が多く概観には便利である。プラーナで陸海は次のように描かれる：中央に円形の大陸 Jambūdvīpa がある。その中心に Meru 山がそびえ、大陸を東西に横断して六つの山脈が地を区切っている。中央の区画は、Meru 山の東西にそれぞれ一つの山脈が南北に延びることによって三分される。山脈によって Jambūdvīpa は九つの領域（varṣa）に区切られていることになり、南端のBhāratavarṣaが「我々の」領域である。Jambūdvīpa の周囲は、ドーナツ形の海陸が順次同心円状に取り巻いており、大陸の数は Jambūdvīpa を含めて七つである。これらのさらに外郭には黄金の土地があって、その上を "Lokāloka 山" が巡っている。

Kirfel は *Kosmographie* の当該箇所で、諸プラーナと MBh（及び Padmapurāṇa）とを同一範疇に入れて論じつつ、MBh-Padma には "Textverderbnis" がある可能性を示唆している（p.57）。また Hilgenberg は *Kosmographische Episode* で、当時入手できた MBh の全ての刊本と Padmapurāṇa とを対照したテキストを示したが、それに先立つ解説において、MBh-Padma のコスモグラフィーが他の諸プラーナをもとにしていること、他のプラーナの記述から逸脱している箇所もあるがそれはテキストの崩れによる場合と、意図的な変更を被っている場合とがあることを主張した。一方 Schubring は Kirfel, *Kosmographie* への書評後半（p.268ff）で MBh の当該箇所を取り上げ、プラーナの整った世界観を出発点にすることなくテキストを精密に検討した。そしてそこでは（Kirfel・Hilgenberg が信じたような）プラーナ同様の環状の陸海は述べられておらず[4]、大陸は同心円状でなく南北に並べられていることを見出し、先行する MBh が改良されて多くのプラーナのコスモグラフィーが成立したことを明瞭に論じた。以下この論文では改めて MBh のテキストを検討して、大地の形態に関して新しい見解を付け加えたい。主要な用語の MBh

全巻にわたる用例や、このテキストと個別のプラーナとの関係などには論及するゆとりをもたないが、今後古代インドの世界観を研究するためにもMBh の当該箇所の理解を深めることは重要である。

2-1. スダルシャナ大陸（VI.6.12-11.14）

VI.6.12-16において、Sañjaya はスダルシャナ大陸（Sudarśanadvīpa）を概説する：これは円盤のように丸く、塩水の海に取り囲まれている。この大陸は月輪の中に映って見え、半分はピッパラの樹の形、半分は兎の形[5]、それ以外は水である。── かなりの無理を伴ったこの説が、満月の中に樹木と兎の形を見ていたことから発生したのは明白である。

VI.7.2-51、さらにVI.8-11にかけてこの大陸の内部の様子が説明される。その地勢はプラーナの Jambūdvīpa とほぼ同じで、海から海まで東西に延びる六つの山脈があり、山脈と山脈の間にそれぞれの領域（varṣa）がある。それら全体の中央部に Meru 山がそびえている。このテキストでも南端の Bhāratavarṣa が、物語の登場人物達のいる場所とされる（VI.7.6a; 13.50ab）。山脈や領域の名称もおおむね、他の諸プラーナで Jambūdvīpa 上に配されるものと同じである。プラーナとの対照は Kirfel, *Kosmographie* p.57以下、Hilgenberg p.XV以下に詳しい。しかしながらプラーナの Jambūdvīpa と等価なのはこの Sudarśanadvīpa 全体ではなく、その一部だけである。VI.7.52-53の Sañjaya の言葉によると、ここで説明が加えられているのは、大陸の半分にあたる「兎」の、胴体の部分にしかあたらず、「兎」の頭部は別の山塊、両耳は二つの亜大陸である。もう一半の「ピッパラ」の方は、このテキストを通じて説明されずに終わる。MBh の Sudarśanadvīpa がそのままプラーナの Jambūdvīpa に相当するのではないということは、これまで明瞭に意識されずにいたが、注意を払っておくべきである。

MBh のコスモグラフィーで次いで注意すべきは、(「兎」の胴の) 中央部に位置する領域 (varṣa)、Ilāvṛta である。Ⅵ.7.7-11に言う：

dakṣiṇena tu nīlasya niṣadhasyottareṇa ca/
prāgāyato mahārāja mālyavān nāma parvataḥ//Ⅵ.7.7//
tataḥ paraṃ mālyavataḥ parvato gandhamādanaḥ/
parimaṇḍalas tayor madhye meruḥ kanakaparvataḥ//Ⅵ.7.8//
ādityataruṇābhāso vidhūma iva pāvakaḥ/
yojanānāṃ sahasrāṇi ṣoḍaśādhaḥ kila smṛtaḥ//Ⅵ.7.9//
uccaiś ca caturāśītir yojanānāṃ mahīpate/
ūrdhvam antaś ca tiryak ca lokān āvṛtya tiṣṭhati//Ⅵ.7.10//
tasya pārśve tv ime dvīpāś catvāraḥ saṃsthitāḥ prabho/
bhadrāśvaḥ ketumālaś ca jambūdvīpaś ca bhārata/
uttarāś caiva kuravaḥ kṛtapuṇyapratiśrayāḥ//Ⅵ.7.11//

一方ニーラの南、ニシャダの北に、マールヤヴァトという名の山が、大王様、東［西］に延びています (7)。そのマールヤヴァトの向こうにガンダマーダナ山があり、そのふたつの中間に黄金の山メールがあります (8)。昇り初めた太陽の輝きをもち、煙のない火のようです。下方に1万6千ヨージャナ[延びている]と伝承されているとのことです (9)。上方には8[万]4[千]ヨージャナです、地の主よ。上でも中間でも水平にも諸世界を覆って立っています(10)。一方その側面には以下の四つの島が存在します、主君よ：バドラーシュヴァ・ケートゥマーラ・ジャンブードゥヴィーパと、バラタの子よ、好ましいことを行なった者の拠り所ウッタラクル国[6] です (11)。

東西に延びる六大山脈のうち、南から三番目の Nīla と四番目の Niṣadha の間に、また東西に延びる二山脈 Mālyavat と Gandhamādana とがあるとされている。プラーナの Jambūdvīpa では、これらと同じ名の山脈は Meru をはさんで Nīla と Niṣadha の間を南北に走っている[7]。MBh の Mālyavat は「5万ヨージャナにわたって立っている (yojanānāṃ sahasrāṇi pañcāśan mālyavān sthitaḥ//Ⅵ.8.27cd//)」とされる。これが高さを表すのか、東西方向の長さを示すのかは明言できないが、Meru 山の高さ8万4千ヨージャナとともに、Ⅵ.6-11における Sudarśanadvīpa の大きさを知るための限られた手掛かりとして記憶すべきである。次に

Meru 山が「下方に」1万6千ヨージャナ延び、その周囲には四つの「島（dvīpa）」があるとされることから、察するに Meru 山の周囲は湖であり、そこに島々があるのだと思われる。プラーナではこれらの島々は言及されないか、島（dvīpa）ではなく地方（deśa）の名にされ[8]、Meru 山は、下方に1万6千ヨージャナ「入り込んでいる」といささか分かりにくい説明を与えられている[9]。これまで、Meru 山が下に何ヨージャナという記述の意味は詮索されておらず、MBh の四つの島々についてもその全体像は明瞭に描かれずに、Kirfel、Hilgenberg が Nīlakaṇṭha の解釈――河に区切られて四つの独立の地域になっている[10]――を紹介している（*Kosmographie* p.93, *Kosmographische Episode* p.XIV）程度なのだが、プラーナの段階で忘れられて行った湖を Meru 山の周囲に想定すれば全てが無理なく理解できる。この湖は、思うにⅥ.7.27で「月の湖」と呼ばれているものである：

tasya śailasya śikharāt kṣīradhārā nareśvara/
triṃśadbāhuparigrāhyā bhīmanirghātanisvanā//Ⅵ.7.26//
puṇyā puṇyatamair juṣṭā gaṅgā bhāgīrathī śubhā/
pataty ajasravegena hrade cāndramase śubhe/
tayā hy utpāditaḥ puṇyaḥ sa hradaḥ sāgaropamaḥ//Ⅵ.7.27//
その山（Meru）の頂から、人の支配者よ、三十抱えあって恐ろしい破壊音のするミルクの流れが(26)、とても好ましい人々に悦ばれる好ましく浄らかなバギーラタの［河］ガンガーとして、変わらない猛烈さで浄らかな「月の湖」に落ちるのです。そ［の河］でその好ましい、海のような湖が出来ているのです（27)。

四つの島の位置は、東に Bhadrāśva（Ⅵ.8.12cd-13ab）西に Ketumāla（Ⅵ.7.29）北に Uttarakuru（Ⅵ.8.2）と明言され、Jambūdvīpa は南になる。Jambūdvīpa は、そこに生えているとおぼしい Sudarśana という巨大な jambū 樹に因んでそう呼ばれている（Ⅵ.8.18-19）[11]。この巨木の実から流れた汁が Meru 山を右回りに回って Uttarakuru まで流れていく

(Ⅵ.8.23)と述べられることから、おそらく四島は Meru の麓で地続きになった半島状をしている[12]。Meru 山の四方に「島」を配するのは仏教徒の世界観と共通する。最初期の仏教徒は大地を円盤状だと考えていたが、次第に四分するようになり、後に中心の山 (Meru) を取り囲む七重の山脈の観念が入り込んでその外側の大海中に四大陸が配されるようになった (Kirfel, *Kosmographie* pp.181-189)。MBh の当該箇所は仏教徒のコスモグラフィーの初期段階と似通っていることになる。仏教徒の四大陸においても北のものは Uttarakuru といい南のものは Jambūdvīpa ということも MBh と仏典の近さを語っている。一種の楽園と見なされる Uttarakuru については、衣類や装身具が樹の実の中にできる (Ⅵ.8.5, 大正1.118a)、大地が黄金 (で覆われている；Ⅵ.8.6, 大正32.180b)、人の死体を鳥が運んでいく (Ⅵ.8.11, 大正1.119ab) といったことが MBh と仏典とに共通している。また仏典の Jambūdvīpa についても jambū 樹が言及されることはよく知られている。Kirfel も Schubring も、MBh における四つの "dvīpa" への言及と仏教徒の世界観との類似には関心を寄せており、大地を四分する観念の古さを論じている (Kirfel, *Kosmographie,* "Einleitung"; Schubring p.271)。思うに MBh の編纂者が、共に Meru 山を中心に据える二つの観念、即ち六大山脈と各領域 (varṣa) をともなう説と四つの陸地の説とを併存させたのである。前者はプラーナに継承され、後者は仏典で発展した。Jambūdvīpa の語は Aśoka 王が自らの版図を指して用い[13]、プラーナでも仏典でも「我々」のいる陸地の名称となっているが、MBh のこの箇所で、「我々」がいる土地 (Bhāratavarṣa) から隔たった島の名として現れるのはこの強引な編纂による。

2-2. 多島説 (Ⅵ.12.1-13.50)

Ⅵ.6.12-11.14で Sudarśanadvīpa 内部を詳述した Sañjaya は、Ⅵ.12.1

-13.50では主に、Jambūdvīpa、Śākadvīpa などのいくつもの大陸について説明を与える。これら諸大陸とそれにともなう海の名は、プラーナの七つの大陸とそれを囲む海の名にほぼ一致する（Kirfel, *Kosmographie* pp.56-57）が、MBh ではそれらがプラーナでのように同心円状に並んでいるとは見なされないこと、大陸の数はいくつもあるがそのうちの七つを話そうという Sañjaya のことば（VI.12.4）にプラーナ的世界観が成立していく過渡的な状態が見て取れることは Schubring が詳しく論じた。ここではVI.12に現れる "Jambūdvīpa" について述べる。

この陸地は Jambūkhaṇḍa（VI.12.1）とも、Jambuparvan（VI.12.5）、Jambūdvīpa（VI.12.9,25）とも呼ばれる。直径は1万8600ヨージャナ、（それを囲んで）二倍の直径をもつ円形の塩の海がある（VI.12.6-7）。円い塩水の海に囲まれ、Śākadvīpa その他のいくつもの大陸と併置されるこの Jambūdvīpa は、VI.8に述べられていた四つの島に属する Jambūdvīpa とは明らかに別のものである。この章の冒頭で、それまでの内容を受けて Dhṛtarāṣṭra 王が Sañjaya に「おまえはここにジャンブーカンダをありのまま語った（VI.12.1ab）」と述べているので、むしろ前述の Sudarśanadvīpa を Jambūkhaṇḍa、Jambūdvīpa 等の名で呼んでいるものと思われる。従来の研究でも、このテキストの Sudarśanadvīpa と（大）Jambūdvīpa とは全く区別されていない。しかしながら先に確認したように、Sudarśanadvīpa（の一部）には高さ8万4000ヨージャナの Meru 山がそびえ、Mālyavat 山が「5万ヨージャナにわたって立って」いる。直径1万8600ヨージャナというこの Jambūdvīpa とは明らかにそぐわない数字である。Hilgenbergは8万4000ヨージャナと1万8600ヨージャナの不適合を意に介していない（*Kosmographische Episode* p. XIII）が、Sudarśanadvīpa とこの（大）Jambūdvīpa とがもとから同一だったとは考えない方が良い。思うに Sudarśanadvīpa に関するコスモグラフィー

と、Jambūdvīpa 以下多くの大陸を述べる説とはそれぞれ独自に発展してきたもので、両者を MBh の編纂者が強引に接続したのではないだろうか。前者はまた、既に見たように複数の観念が混ぜ合わされて出来ていた。MBhⅥのコスモグラフィーは、月面の模様を大地の反映と見る観念・六大山脈と各領域（varṣa）をともなう説・四つの陸地の説を一つにしたもの（Ⅵ.6.12-11.14）に、さらに多島説（Ⅵ.12.1-13.50）が突き合わされて、不均衡や不統一が十分に克服されずに残っているものであると考える。

参考文献

Hilgenberg,L.: *Die Kosmographische Episode im Mahābhārata und Padmapurāṇa* (Kohlhammer, Stuttgart) 1934

Jacobi,H.: "Cosmogony and Cosmology (Indian)" J.Hastings ed. *Encyclopaedia of Religion and Ethics* vol.4 (T&T Clark, Edinburgh) 1911 pp.155-161

Kirfel,W.: *Die Kosmographie der Inder* (Kurt Schröder; Bonn, Leipzig) 1920

do: *Das Purāṇa vom Weltgebäude* (Universität Bonn) 1954

定方　晟：『インド宇宙誌』(春秋社) 1985

Schubring,W.: (書評) "W.Kirfel, Die Kosmographie der Inder" *ZDMG* 75 (1921) pp.254-275

Wilson,H.H.: *The Vishnu Purana, a System of Hindu Mythology and Tradition* (John Murray, London) 1840

注

1) 以下、Ⅵ.6.4-10cd は MBhⅢ.202.3-10ab と類似している。

2) Kathopaniṣad 5.4,7; Śvetāśvataropaniṣad 5.11,12; Bhagavadgītā 2.13,22

3) ここにその法則は説明されていないが、五元素とその性質 (guṇa) との関係から推して MBhⅫ.224.35-39; 225.3-10 に述べられているものと同じであると思われる。それによると、より根元的な存在から発してきた元素は自ら展現しながら、新たな性質 (guṇa) を一つずつ加えた次

の元素を生み出す。収束の際には逆に、固有の性質を先行の元素に奪われて各々の元素は存在をやめていく。

4) 若干のプラーナでも環状の陸海は確認できないと述べている（p.272)。

5) dviraṃśe pippalas tatra dviraṃśe ca śaśo mahān（そこ［Sudarśanadvīpa］において二分の一の部分にピッパラ［の形］があり、二分の一の部分に大きな兎［の形］があります)/Ⅵ.6.16ab/——文脈上"dvis"を「二分の一」と解さざるをえない。

6) このテキストでUttarakuruは常に複数形で現れる（Ⅵ.7.11; 8.2,12)。この名が国名（民族名の複数形をとる）として古くからポピュラーだったことの名残ではないだろうか。

7) Kirfel, *Kosmographie* p.93; *Weltgebäude* 1.Textgruppe 2.Kapitel 32 (p.12), 2.Textgr. 2.Kap. 37-39cd (p.95)

8) Kirfel, *Weltgebäude* 2.Textgr. 2.Kap. 46-47 (p.100)

9) Kirfel, *Kosmographie* p.93; *Weltgebäude* 1.Textgr. 2.Kap.4 (p.7), 2.Textgr. 2.Kap. 42 (p.97)

10) "dvīpā iva dvīpāḥ nadyantaratvād varṣāṇi（島々［というの］は河の間であることによって島々の如く［になっているの］であり、［実際は地上が区分されて出来た］領域である)"

11) dakṣiṇena tu nīlasya niṣadhasyottareṇa tu/
sudarśano nāma mahāñ jambūvṛkṣaḥ sanātanaḥ//Ⅵ.8.18//
……/ tasya nāmnā samākhyāto jambūdvīpaḥ sanātanaḥ//Ⅵ.8.19//
一方ニーラ［山］の南ニシャダ［山］の北に、スダルシャナという名の大きな永久のジャンブー樹があります（18)。……そ［の樹］の名に因んで［その島は］永久のジャンブードゥヴィーパと呼ばれています（19)。

12) 半島状でも dvīpa と呼ぶことは、両（dvi）側に水（ap）をもつという語源から、あるいは Sudarśanadvīpa 上の「兎」の両耳にあたる亜大陸が Nāgadvīpa、Kaśyapadvīpa と呼ばれている（Ⅵ.7.52cd）ことからも可能だと考える。

13) 小摩崖法勅："jaṃbudīpa (Sahasram, Gavimath, Brahmagiri), jaṃbudipa (Rupnath, Bairath) [skt. jaṃbudvīpa; jaṃbu=jaṃbū]"

（文学部助手）